

二月十日

六時起床。マイノリティのデザインの可能性についての考えが少しまとまりかかる。モダニズムの抽象性に対して、人間の生命の個別性、複雑性すなわち生命体そのものの具象性を考究する必要がある。それは同時に生活への視点でもある。一見でたらしめしか見えぬ自然の様々な形象への新しい見方でもあろう。人間の形には深い必然がある。その生命体、あるいは生命群とモダニズムの形との関係はそれほど深い関係を持ち得ずにいる。科学そのものの進歩が人間の生命と離れて外へ外へと外延してゆくばかりであったからだろう。

二〇世紀は戦争の時代でもあった。宇宙空間への強い関心はある意味では激しい競争を生み出した。それは国家間の新しい形での戦争でもあった。スペースシャトルの悲劇的な事故、一昨年の九・一一の事件は小さな戦争でもあったのだ。難民の問題、エイズの子供達その他諸々我々は新しい問題に直面している。これ等の問題は考えを極めれば生命そのものへの新しい視点を我々にうながしているのではないか。かつてバックミンスター・フラアは世界各地にうえて死ぬ子供達がいるという現実にたいして一つの考え方を示した。空輸可能な軽さを持つ構造物へのヴィジョンである。その後の建築的試みにはそのような事例はない。

フラアの試みはヒューマニズムとアメリカ型の合理主義とが結びついたものである。今、世界で起きている諸々は素朴なヒュー

マニズムだけでは解決できぬ。しかも問題は近代化を達成し得ぬ地域、国家にだけ発生しているわけではない。むしろ成熟した消費社会に辿り着いたと思われる地域で生まれつつある問題の方がより深刻であるのかも知れない。日本の都市の現実は深刻である。その問題と対峙するにはモダンデザインを生み出した近代の考え方は不十分なのだ。人間の絶対的矛盾をも含んだ生命体組織への強い視差が先ず必要だろう。生命体をなぞるが如き手付も不可欠である。現在の科学技術の進歩そのものがそれらをつながしている。